

事例2 (株)南武

油圧シリンダ製造現場で活躍する「ドリルガールズ」



野村和史社長

(株)南武（東京・大田区、野村和史社長）は、主に自動車産業、鉄鋼産業向けに特殊油圧シリンダを製造する専門メーカーだ。一九九八年、製造現場の技術職として初めて高卒の女性を採用、以後ほぼ毎年、同じ女子高から技術職を採用してきた。いつしか「ドリルガールズ」と呼ばれるようになった彼女たちが、男だけの世界だった製造現場に入ること、さまざまな良い効果をもたらされている。

「事務より工場の方が面白そう」

自動車のエンジン製造ラインの金型製造用、製鉄所での鋼板の巻き取り用、超小型センサシリンダなど、特殊な用途に使われる油圧シリンダを、主にオーダーメイドで生産する南武は、オンリーワンの技術力で取引先の厚い信頼を得ている。国内で

十一件、アメリカで四件の特許を保有し、二〇〇五年には「モノづくり部品大賞」奨励賞を受賞した。

そんな技術志向の強い同社が高卒の女性の技術職を初めて採用したのは、野村和史現社長が一九九五年に就任して、三年目のことだった。

中小の製造業の場合、開発・設計や製造現場の技術職は大学の工学部や工業高校を卒業した

男性、総務や経理の実務にあたる事務職は女性と分けられているのが普通。南武も従来、高卒の女性社員を、もっぱら事務職に配属してきた。地元のスポーツで名の通った蒲田女子高校からは毎年、事務職を採用してきた実績があった。

九七年秋、南武は例年通りに蒲田女子高校に求人を出し、野村社長は応募してきた女子生徒を連れて会社を案内した。事務職の採用だが、何を作っている会社か理解してもらうために製造現場も見学させる。だが、その年は例年とは違い、案内した後、こんなことを聞いてみた。

「よかったら工場で働いてみませんか」

背景には製造現場の深刻な人手不足があった。当時は大学新卒者も、地元の工業高校からも良い人材をなかなか採用できず、危機感が広がっていた。野村社長には「ひよつとしたら女性でも適性のある人材がいるかもしれない」という思いがあった。

もちろん、求人は事務職だからダメでもともと。ところが、バスケットボール部でがんばってきた彼女からは、次のような答えが返ってきた。

「事務よりも工場の方が面白そう。やってみたいです」

興味本位ではなく、手に職をつけたいという意志はしっかりしている。父親が町工場で旋盤工として働いていたので、工場

企業データ	本社	東京都大田区萩中3-14-18
	☎	03-3742-7377、03-3745-1058
	http://	www.nambu-cyl.co.jp/
	業種	特殊油圧シリンダ設計・製造
	創業	1941年8月
	設立	1965年12月
	資本金	5800万円
年商	グループ	20億円(2009年10月期)
	従業員数	114名(09年10月末)

の作業にも抵抗感はないという。これで、彼女を技術職として採用することで話は決まった。

「でも、一人だけでは心細いでしょうから、友だちも誘ってみてはどうか」

数日後、彼女は同じバスケット部員を一人、会社に来てきた。二人ともスポーツをやってきたから、体を動かすことが好きで、まじめで礼儀正しいが、ぱり屋に見えた。その日のうちに二人目の採用も決めた。

こうして九八年春、二人の初

製造現場を3Kとはもう言わせない

「うちの工場に、高校を出たばかりの女の子が来るそうだ」

当時は男性だけだった製造現場はざわめいた。若手社員の多くは女性と一緒に働けるのは楽しいと喜んだが、工場長や熟練工の口からは、「危ない」「女なんて気をつかうから嫌だ」「すぐ辞めてしまふよ」と、ネガティブな意見が次々に飛び出す。野村社長も「機械はコンピュー

ター制御が進み、男性でないとできない力仕事はなくなった」とは思いつつ、仕事をうまく覚えられるか、ケガしないか、汚さやキツさに音をあげたりしないか、先輩に怒鳴られて泣いたりしないかなど、不安でいっぱいだったという。

会社側は、彼女たちの入社前にさまざまな受け入れ準備をした。女性専用のウォシュレット付きのトイレや休憩室を新設、工場にエアコンを入れ、有線放送のBGMを流すことも始めた。「中小企業の製造現場は3K職場だ」というイメージが定着し、



現場の雰囲気を変えた「ドリルガールズ」

それが人手不足を招いていました。何とかしてそれを変えたかったんです。私はこの会社の社長になる前、英国系の総合商社に勤務していた経験があります。その職場環境がすばらしく、男女ともに生き生きと仕事していました。私はこの女性技術職の採用をきっかけに、職場環境を改善し、良い人を採用、育成して、長く働いてもらいたいと思ったのです」（野村社長）

午後五時十五分の定時退社を奨励し、同業他社に先んじて週休二日制を導入。年間休日はい百三十日もある。飛び石ではなくまとまった休みがとれる「オリジナルカレンダー」をつかったのも、脱3Kの一環だった。

初の女性技術職の二人は、単なる「お姫様」ではなかった。上下関係の厳しい体育会系で、キビキビと行動し、挨拶もきちんとできる。若手社員が金属加工機の手操作方法の説明を始めると、真剣な表情でメモをとる。新人だから失敗もするが、反省して注意をよく聞き、うまくできるまで

再挑戦する。その姿からは、「技術を身につけて、一日も早く一人前になりたい」という前向きな気持ちがひしひしと伝わってきた。

最初は冷ややかだったベテランの態度も変わってきた。「男も女もないから」と、培ってきた技術を彼女たちにも伝え始める。技術のことは一からのスタートだった彼女たちだったが、知識、技術、ノウハウをどんどん吸収し、最初の一年でそのスキルは驚くほどの伸びを見せた。

「男性社員が敬遠しがちだったマシンニングセンターやNC旋盤のオペレーターをやらせてみると、これは女性の方が適しているんじゃないかとも思いましたね」（野村社長）

5S運動も進んで実践。道具の整理整頓でムダな動きをなくし、床にゴミが落ちていたらすぐに拾う。仕事を教えている手前、男性社員もやらないわけにはいかず、5Sは徹底されていた。

やがて、彼女たちが職場で「○○ちゃん」とファーストネームで呼ばれるようになる頃に

は、男性社員の意識も大きく変わっていた。外面だけでなく、内面でもがさつさ、乱暴さが影を潜める。以前は「道具の渡し方が悪い」など、ささいなこと

でカッとなった男性も、後輩にも礼を言い、ていねいな言葉遣いをするようになった。なかなか出会いのチャンスがなかった独身の男性社員は、社長が「社内恋愛、社内結婚は大いに結構」と発言すると、ことさら意識してジェントルマンに変身。

ちなみにこれまで、技術職の男女の職場結婚で七組のカップルがゴールインしている。

野村社長は、同じ高卒なら男性よりも女性の方が生産性は高いかもしれないという。

「製造現場を離れ生産管理に移っても、図面が読めて何が足りないかがすぐわかるので部品の調達もできます。実にユースフルなスキルワーカーですね」

国際標準規格のISO9000、ISO14000関連の業務でも、労働安全やコストダウンの取り組みでも能力を発揮。能力とやる気次第では設計や技術営業の分野でも十分活躍でき

るとみられている。

女性技術職の評判は周辺の中小企業でも話題になり、その後、バスケット部やバレーボール部で活躍した生徒を技術職として採用する流れができた。そうやって増えていった女性技術職は、作業着を着て切削用のドリルを持つ姿から、いつしか「ドリルガールズ」と呼ばれるようになった。

アジア版ドリルガールズの育成

その後、大きな事故もケガもなく、十年以上の時が流れた。

現在、現役のドリルガールズは三名で、社外の技術研修にも積極的に参加し、新人の教育係も務めるなど、中堅社員として活躍している。出産を機に育児に専念するために退職した人はいらるが、仕事についていけずに短期間で辞めた者はいない。OGも含めると二十名近い彼女たちの結束は固く、会社では一年間の育児休暇後の復職支援プログラムも考えている。

かつて南武の成功例を見て、

周辺の町工場も高卒女子の技術職の採用を試みたが、あっさり早期退職してしまうなど、どこも長続きしなかったのとは対照的である。

「給与体系を男性と同じにし、職場環境の整備や休日を多くするなど待遇を良くして受け入れたいからこそ続いたのだと思います。女性、男性に関係なく、人を大事にする文化、社員に対して情報をオープンにする文化があれば、人材は育つのではないでしょうか」

ドリルガールズの定期採用は二〇〇八年秋のリーマンショック後、二年間の中断を余儀なくされる。約七割を占める自動車産業向けが十五年前の水準まで落ち込んだためだ。業績は昨年、輸出を中心に約四〇%増のV字回復を果たし、最悪期は脱した。今年は中国の江蘇省で新工場を立ち上げ、ドリルガールズの採用も復活する予定で、野村社長は「リセットの年」と表現する。「今後は海外拠点の拡大も図っていきます。ドリルガールズから将来、係長や課長、工場長のような管理職に昇進する人が

出てくる可能性はあると思いますが、私としては海外での仕事にもぜひチャレンジしてほしいと思っています」

すでに、〇六年には二名の女性技術職が、新設したタイの生産拠点で二週間、現地採用の約十五名の「アジア版ドリルガールズ」の指導・育成に当たっている。中国でも若い女性を製造の戦力にしたいと考えているので、近い将来、元祖ドリルガールズたちの指導・育成を受けた「女子切削隊」が誕生するかもしれない。野村社長は「タイは男性よりも女性の方がしつかりしているようですし、中国も期待できます。アジアでも女性から良質の労働力が得られると思いますね」と、アジアでの女性活用に大きな期待をかけている。元祖ドリルガールズは、そのいいお手本になることだろう。

十三年前にまかれた二粒の種はすくすくと育ち、花を咲かせた。今、新しい種がアジアにまかれ、もつとたくさんのお花が咲こうとしている。

ジャーナリスト 寺尾 淳